

戦後日本における地域教育計画論の研究

― 矢口新の構想と実践 ―



2014年2月、博士論文の公刊にあたって

こし かわ もとむ
越川 求

本書は、博士学位請求論文「戦後日本における地域教育計画論の研究―矢口新の指導による実践を中心に―」（2013年3月、立教大学大学院文学研究科に提出、2013年9月、教育学博士の学位を取得）を、単著として公刊したものです。公刊に際して表題を『戦後日本における地域教育計画論の研究―矢口新の構想と実践―』と改め、本文に必要最小限の加筆・修正を行い、巻末資料については大幅な削減を行いました。立教大学大学院文学研究科教育学専攻において、後期博士課程6年間にわたり、私が行ってきた研究の成果をまとめたものです。

今から10年ほど前、私が中学校教諭として25年目を迎え、社会科や特別活動などを中心に自分の住居のある埼玉県坂戸市内で教員生活を送っていたころ、「自分が受けてきた教育や行ってきた教育実践を振り返り大きな視点で考える」とともに「これからの教育の方向を考えてみたい」という漠然とした気持ちが生まれていました。偶然にも郵便局で見つけた放送大学大学院の募集要項が目にとまり、研究生活がスタートしました。

「学校と地域との連携」に今後の教育の改善の可能性を期待し、修士論文において〈協働学校〉論を提起し、さらに研究を深めるため立教大学大学院に入学し博士論文に取り組みました。研究テーマは、コミュニティ・スクールや地域の教育計画の成立から発展・衰退の経過を歴史的に検討すること。そこで、戦後教育改革期に地域の「民主化」と「復興」にとりくんだ地域教育計画論を研究対象とし、戦後社会科成立の先駆的実践であり代表的な地域教育計画とされる埼玉県「川口プラン」から検討していくことにしました。

中央教育研究所が中心になって研究を進めた「川口プラン」については多くの先行研究がありましたが、同研究所の第2の実験プランである埼玉県「三保谷プラン」については全くといってよいほど研究されていませんでした。中央教育研究所の研究活動については、戦前からの教育学者で日本教育学会長を長く務め戦後の教育界に大きな影響を与えた海後宗臣が研究部長をしていたにもかかわらず、これまで教育史的な位置づけはなされていなかったのです。

三保谷は坂戸市の隣の川島町にあり、自宅から車で1時間足らず、もってこいの場所でした。その三保谷で、中央教育研究所の中心メンバーで、研究誌『教育科学研究』の代表者である矢口新という研究者を発見したのです。資料の調査と関係者宅に訪問し聞き取りをおこなった結果、村の民主化を地域教育計画により実践した矢口を中心とした研究者たちの足跡に、大変驚きました。

この時までの矢口についての私のイメージは、民意に逆行した「富山県の七・三体制」を推進した人物というマイナスの言説によって覆われていました。

しかし、矢口の執筆した1940年代から50年代の膨大な論稿を検討していくと、矢口が戦後の民主教育の推進に大きな役割を果たし、影響を与えていたことがわかりました。実際に現地の資料にあたり、聞き取りをする中で歴史的な事実に近いという気持ちが大きくなっていきました。

矢口が指導した茨城県水海道小学校や富山県北加積小学校に残されている資料の整理や当時の教員の方々へのインタビューからは、1950年代から60年代の教育実践の生き生きした姿が浮かび上がってきました。国立教育研究所や各地域の教育研究所の関連で、1950年代に地域を建設する実践が質的にも量的にも発展

していったことに確信をもちました。

大田堯の指導した広島県の「本郷プラン」で地域教育計画は終焉したという従来の通説を変更し、戦後地域教育計画論の内実を明らかにしなければならないと考えました。矢口の指導してきた実践は、地域教育計画論を原点にして、戦後のカリキュラム構造や社会科、自治活動という戦後教育の基礎を形成するものであり、さらに富山県総合教育計画も教育実践的な視点から再評価しなければならないということを、強く思うようになっていきました。

海後・矢口という、戦後教育史の中で今までまったく見落とされてきたこの系譜における地域教育計画論の歴史的意味を明らかにしなければ、戦後教育の歴史的構造は解明できない、またコミュニティ・スクールについても論じられないと考え、更に研究を進めていきました。

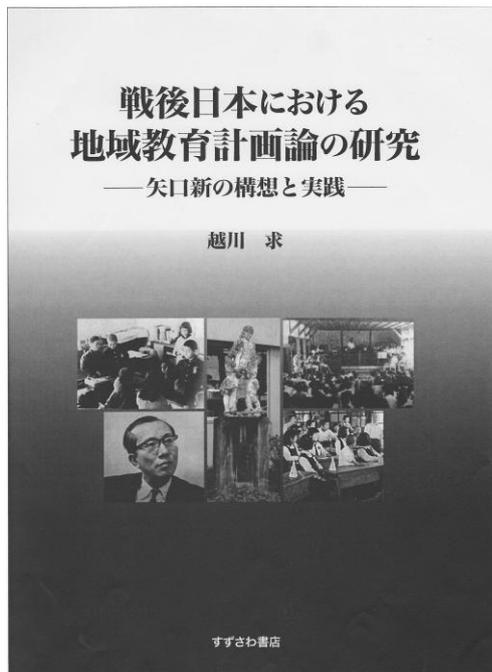
そして最後に、地域教育計画論成立に関する戦前からの連続性を明らかにし、矢口の研究活動と実践の今日意味を位置づけ、本研究のまとめとしました。

本書の研究は、「三保谷プラン」の中心者の矢口新を発見した時の衝撃と感動が原動力となりました。すぐさま連絡をとり、矢口新の娘夫妻（矢口みどりさん・榊正昭さん）及び小澤秀子さん（矢口の片腕的存在で現在は矢口の設立した(財)能力開発工学センターの理事）と共に、“矢口教育学研究会”を後期博士課程1年時に立ち上げたことが、本研究の推進に大きな力となりました。矢口の文献調査や茨城県や富山県での現地調査と聞き取り調査は、この研究会がなかったらとても推進できるものではありませんでした。2年目からは、日本教師教育学会で立教大学前田一男教授から紹介していただいた横浜国立大学金馬国晴准教授も参加され、共同調査や議論を積み重ねてきました。この研究会も、今年で7年目を迎えました。

本著の公刊にあたり、能力開発工学センターの関係者および矢口教育学研究会で調査に協力いただいた茨城県常総市立水海道小学校関係者、富山県滑川市立北加積小学校関係者、富山県総合教育計画関係者等に、あらためて心より感謝を申し上げます。

矢口新の教育遺産を継承しようとする人々、戦後教育を再評価しようとする人々、さらには今後の日本の教育の改善に尽くそうという多くの人々に、本書を読んでいただければ幸いです。

JADECニュース92号（2014/5/20）より



[越川求氏略歴]

1978：東京大学教育学部卒

1978～2011

埼玉県公立中学校教諭として坂戸市内中学校に勤務

2005：放送大学大学院文化科学研究科修了 修士学位取得

2013：立教大学大学院文学研究科後期博士課程修了

教育学博士学位取得

* 事務局からのご案内 *

能力開発工学センターにお申込みいただければ、定価（本体4800円＋税）を、著者割引価格4000円（税込、送料別）でお届けすることができます。ぜひ御一読ください。

（申込方法）電子メール： info@jadec.or.jp,

FAX： 042-497-8044